バンコック生活をふりかえって——土木技術者の妻の記——

椎　貝　耀　子*

1973 年の1月，主人と3才になる娘とともに，タイに 10 日ほど滞在致しました。バンコックで行なわれたAIT（アジア工科大学院）主催の国際水理学シンポジウムに出席するのが目的でしたが，1969 年から 1971 年にかけて，主人が AIT で教えておりましたとき，2年間家族でバンコックに住んでおりましたので，会いたい知人も多くあって，短いながら充実した日々を過してまいりました。それはまた，日ごろ家庭にひっこんでいる私にとって，得がたい貴重な日々でもありました。国際会議に妻として参加した経験を綴る一方，バンコックでの生活を思い出しながらタイのこと，AIT のこと，国際協力のことなどにふれてみたいと思います。

1月といえばタイでは乾期にあたり，1年中で最も気候の良いときです。冷たい雨の降る冬の日本を離れ，夕日にきらきら輝くバンコック郊外のドン・ムアン空港に降り立ったとき，一瞬心が洗われるような気が致しました。娘の秋津も，にわかに薄着になったのが嬉しくてピョンピョンとタラップを跳ねて降り，元気一杯そこらを駆け回るほどでした。すっかり装いを新たにした空港のビルで，主人の教え子であったスーパット博士をはじめ AIT の人たち数人の出迎えを受け，日の落ちたハイウエイを車で市内のホテルに向いました。途中，建設中の立体交差，新しいビジネス・センターなど，発展途上国の活気がそこここに感じられ，大変嬉しく，また心強く思いました。主要道路にはあいかわらず車があふれて，渋滞した車に，少年がジャスミンの花を売り歩いているのも懐しい光景でした。タクシーには，ほとんど日本の古い車が使われておりますが，その中で，タイ人が「サムロー」と呼ぶ窓もドアもない簡単な三輪の自動車は，やや数が減ったように見えました。タッ タッ タッという大きな音とともに，狭い車間を縫うように走っていくさまは，なかなかユーモラスで，そのうえ安くて風通しが良くて，サムローはバンコック庶民の足なのですが，うしろの座席の位置が高く，急ブレーキをかけると乗客が外へ飛び出すので，バンコック市内からは，そのうち姿を消すのかもしれません。

宿舎のドゥシット・タニ・ホテルは，3年前に建てられたタイ人経営の二十数階建てのホテルで，市の中心部にあるルンピニ公園のわきにたっております。AIT は昨年末新しいキャンパスに移転したばかりで，まだ会議場が完成していないため，会議はすべてドゥシット・タニ・ホテルで行なわれました。私たちは 10 日間ずっとこのホテルに滞在致しましたが，設備もサービスもゆき届いており，大変気持よく過すことができました。

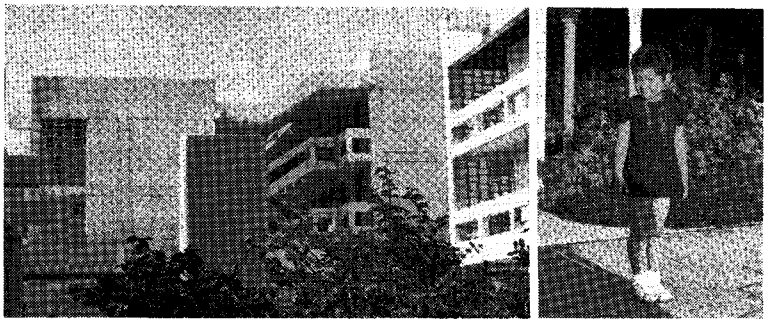
到着した翌朝，ホテルの階下で，会議参加の登録を致しました。中央大学から AIT へ教えにきておられる首藤伸夫先生ご夫妻も，朝早くからホテルに詰めておられました。AIT で最初の日本人スタッフだった主人は，東工大に戻ったあとも資金援助や人事に関して協力しておりますので半分 AIT の人間であるような気持で，早朝から忙しく飛びまわって，この日から会議の終るまで私と秋津は，完全にほっぽり出されてしまいました。夫妻あるいは子供連れできた人が，ほかにも二十数組あり，会議中は多かれ少なかれ家族はほっぽり出されるわけで，そのために「レィディーズ・プログラム」というのができておりました。歓迎会，王宮，寺院の見物，タイシルク工場の見学，買物等々，ぎっしりとスケジュールが組まれ，AIT の水理関係のスタッフの夫人であるイギリスのハドソン夫人，アメリカのアッカーマン夫人，タイのブンシー夫人，首藤夫人らがお世話をしておられました。私は，1971 年に AIT で行なわれた土質工学の国際会議のときの「レィディーズ・プログラム」に参加した経験があるうえ，バンコックの地理は何とかわかるし，タイ語も一応は通じますので，子供連れながら，できるだけご協力することに致しました。

その日の昼食は，友人のブンシー夫人が秋津と私を運転手つきマイカーで市内のレストランへ案内してくれました。タイでは，タノム・キチカチョルン氏をタノム首相と呼ぶように，姓を使わず名で呼ぶので，ときどき，だれとだれが夫婦なのかややこしくなりますが，ブンシー夫人のご主人はスビン博士で，主人の AIT 時代の同僚です。私たちはタイ風にアレンジされた中国のヤム茶を味わいつつ，AIT のことやお互いの近況などを英語にタイ語をはさみながら語り合いました。生後8か月から2年間をタイですごした秋津は，タイ語を多少覚えており「アロイ（美味しい）！」を連発，小さな皿に入ったナンプラ（魚からとった醤油）まですすって，しまいに

* 椎貝博美（東工大助教授）正会員夫人

は給仕と鬼ゴッコを始めたので，私たちはあわてて退却しました。

私とたいして年令の違わないブンシー夫人は，現在チュラルンコン大学でテクニカル・イングリッシュを教えておりますが，最近まで AIT のアシスタント・ライブラリアンとして，夫妻でアジアの若い人たちの教育につくしておりました。全体としてタイの女性はなかなか勤勉で，タイで最も難関といわれる国立のチュラルンコン大学では，女性が半数を占めております。だれもかれもが大学にゆくのと違って，彼女らには選ばれた者という自覚があって，みんなしっかりと勉強して，卒業後はアメリカ，イギリス，その他の国に留学したり，あるいはそのまま社会に出て有能な働き手となっております。現国王の第一皇女は，昨年アメリカ人と学生結婚されましたが，現在 MIT で原子物理学を専攻しておられ，優秀なタイ女性の代表といえましょう。バンコックに働く女性の多いのは，もちろんほとんどが生活の糧をうるためですが，ブンシー夫人のように子供ができても働けるのは，ひとつには人件費が安くて，メイドや子守りを楽に傭えるからです。低所得者ですら，頼む親，親戚がいないときは，十三，四才の女の子をごく安い給料で子守りに傭ったりします。まだ大家族で暮らしている例が多いのですが，日本同様，しだいに核家族化が進み，かつ教育が普及して女性がメイドや子守りのような職業に甘んじなくなったとき，女性の社会進出に新しい問題が生じることと思います。



AIT の学生寮（左）と，バンコック郊外のローズガーデンにおける秋津（右）

その日の夜は， AIT の学長主催のカクテル・パーティーに主人とともに招かれました。10年前私たちが，ボストンにいたときにお世話になった MIT のイッペン博士のお顔も見え，国際水理学会会長の林泰造先生，この3月に AIT の新学長になられたアメリカのホルシャー博士も出席しておられました。

翌3日目は，開会式が行なわれました。式終了後，男の人はすぐ会議に入り，女の人は「レィディーズ・プログラム」に参加致しました。夫人の参加者は，日本から首藤夫人と私の2人で，子供連れは，ほかに2人おりました。親同士，子同士すぐに親しくなり，それからは，子供たちをまとめて交代で子守りをすることに致しました。おかげで，その日の夜あった会議参加者全員のためのレセプションにも出席でき，子供たちのほうも仲間ができて，俄然生き生きとしてまいりました。

会議開催中，空は連日澄み切って，湿度が低いせいか日本の夏にないさわやかさでした。街は活気にあふれ，果物屋の店頭には色とりどりの熱帯の果物が山のように積まれておりました。1月は，ちょうど水瓜の季節でしょうか，マンゴーはまだちょっと青いようでした。市場では，生きたカニがわらで足を縛られ，カエルはむき身にされ，そのほか，魚，野菜，果物，乾物などが所狭しとならべられておりました。市場は，タイ人の食生活を知るにはとても面白い所で，豚のしっぽなど落ちていてお世辞にもきれいとはいえないのですが，安くて食物が豊富で，タイにいた当時は，輸入品の多い清潔なスーパー・マーケットよりも，むしろ気にいっておりました。

暇をみて以前私たちが住んでいたアパートへ行き，ポーランド人の友人に会いました。彼女とは，YWCA でいっしょにタイ語を習って親しくなり， AIT の集まりにもよく誘ったものです。ポーランドは，タイへ薬品や自転車を輸出し，タイからはゴムやチークを買っておりますが，彼女のご主人は船会社から派遣され，ポーランドとアジアの国々を往き来する船の世話をしております。彼女の話によると，バンコックにはここ1年の間に急激に日本人がふえ，今いるアパートも日本人の家族ばかりになってしまった由，淋しいので，よそへ移ろうとしたら，どのアパートも半分以上日本人で占められており，結局引越しは諦めたとか。10 才になる息子は，英語で遊ぶのを断念し，いまでは日本語の会話はおろか，平仮名，片仮名も読め，小学館の「小学四年生」を毎月愛読し，見るテレビは「仮面ライダー」，「変身忍者嵐」などみな秋津と共通で，「ウルトラマン」の歌を2人で合唱するのを聞きながら，良しにつけ悪しきにつけ，日本人の当地における影響力は甚大だと痛感致しました。

会議最終日の午後，ランシットにある AIT の新しいキャンパスを見学致しました。新キャンパスは，バンコックから 42 km 北， ちょうどドン・ムアン空港の先にあります。全く起伏のない田園を貫くハイウエイをバスで1時間，のんびりと草を食べる水牛の姿を眺めているうちに，Asian Institute of Technology と書かれた白い正門につきました。50万坪という広大な敷地に，完成したばかりの建物が点在し，明るい太陽のもとで，白くまばゆく輝いておりました。

AIT は，1967 年に SEATO の大学院として発足，その後国際機関として独立し，アジア工科大学院となりました。アジア各国からの留学生に勉強の場を与えるのが目的で，現在は 240 名の学生が，修士課程，博士課程で学んでおります。以前は，バンコック市内のチュラルンコン大学と同居しておりましたが，タイ政府が土地を無償で提供し，アメリカ合衆国，日本，イギリス，カナダ，オーストラリア，ニュージーランド，シンガポール，その他の国々が資金を出しあって，そこに一大キャンパスを建設するに至ったわけです。現在，土木工学科の建物，食堂，学生寮などが完成しており，そのほかに AIT センターと教職員住宅が近く完成する予定です。アメリカに次いで多額の資金を寄付した日本は，250 万ドルかけて，久米建築事務所設計，大林組施工で，センターを建設中です。これは，レクリエーション施設，学生クラブ，会議場，ホテルを含む堂々としたもので，その誠意ある仕事ぶりが AIT では評判だと聞いております。AIT の学生は非常に優秀で，卒業するとほとんどが帰国して開発途上国である自国の建設・発展に貢献しております。日本政府が，アジアのために，これからもどんどん援助するよう祈らずにはおられません。

AIT の理事は，多くの国から選ばれており，日本では，兼重寛九郎先生が理事として AIT のために大きな力となっておられます。教職員は，アメリカ合衆国をはじめ，イギリス，タイ，フランス，日本，フィリピン，イスラエル，バングラディシュその他さまざまな国の人たちで構成されております。日本からは，現在は首藤先生お一人ですが，いままでに，主人のほかに，建設省から中村慶一先生，東大から西野文雄先生が海外技術協力事業団より派遣されて，それぞれ 2 年ずつ教えられました。日本からの留学生としては，東工大土木の卒業生が 2 名，修士課程で学んでおります。日本の若い人の中にアジアのことを，自分の肌で感じ，自分の目で確かめて理解を深めようとしている人たちがいるということは，大変たのもしく思われます。日本人は，ごく最近までアジアのことにはあまり関心を払わず，かくいう私もタイへいって初めて「ああ，私はアジア人なのだ」と自覚したわけですが，タイ人の方は，常に「アジア」ということを意識しており，新聞もアジアに関する記事が中心ですし，小学校 4 年しか出ていない女の人でも，アジアの国の首都ぐらいすらすら答えます。これからの日本人はアジア人としての共同意識をもって，アジアの人びとと交わっていくことが大切であり，その点から考えても，日本の学生が AIT で学ぶことは，大変意義あることと思います。

AIT は，設立当初，アメリカ人が中心となっていたためか，アメリカの大学に雰囲気が似ており，厳しい中にも自由と明るさが感じられます。家族も気軽に学内に出入りしており，日本では主人の研究室など覗いてみたこともない私も，AIT には子供連れでしばしば出かけました。子供は，実験室や本のぎっしり詰った部屋で仕事をしている父親を見て，少々尊敬の念を覚えたらしく現代の父親の権威失墜を回復するには，子供に働く父親の姿を見せるに限ると思いました。そのほか，クリスマスには，教職員と学生，それに家族が加わって大パーティーを開き互いの親睦をはかります。社交的な集いは，いつも夫婦いっしょで，結婚した当時は，土木に関して全く無知だった私も，タイへ行ってからは，直接見聞きすることが多く，いまでは土木こそ国土建設の基盤であり，人間の生活に最も密着した欠くべからざる学問の一つであると確信しております。どうやら，子供のみならず，私のほうも教育されてしまったようです。

AIT から戻ったのち閉会式があって，4 日間の会議の幕を閉じました。続いてウィーク・エンドに入り，会議参加者の多くは，3 日間の予定でタイの伝統的な古都である北のチェンマイへと出発しましたが，私たちはバンコックにとどまって，プールで泳いだり，秋津を象にのせたり，タイ象棋を買いに行ったりして，のんびりと過しました。明けて日曜日は，もう荷造りの日で気ぜわしく，主人は，やはり会議にきておられた東工大の吉川秀夫先生とともに早朝から AIT へ行き，今後の日本の協力について，最後の打合せを致しました。

こうして，私たちのタイ旅行は，あっという間に過ぎてしまいました。国際会議をとおして多くの新しい友人を得たこと，AIT の人びとと再び接触して，国際協力の重要さを再認識したことが，今回の旅行の収穫といえましょう。とくに主人は，人なつっこく寄ってくるかつての教え子たちに接して，新たに使命感をかきたてられたようです。私たちは，タイで 2 年間の生活を終え帰国した 1 か月後に，長男が通学途中車にはねられて死亡するという悲しい経験をし，長男の思い出に満ちているタイを再び訪れることに恐怖感さえ抱いておりましたが，こうして旅行を終えたいま，タイの明るい空の下では，そうくよくよしないで生きていけるという自信ができました。いまでは機会があれば，また家族でタイへ行き，国際協力に少しでもお役に立てればと思っております。

このたびのタイ旅行では，伊藤剛先生をはじめ，日ごろお名前だけ存じ上げておりました日本の水理関係の諸先生方に初めてお目にかかり，道中，大変お世話になりました。最後になりましたが，誌上を借りてお礼申し上げます。

(1973.5.11・受付)